

六月二十七日のばん、おかあちやがメリヤスからかえってこなんだ。ぼくは、おかあちやがながれたかなって、しんぱいした。

ぼくはどの夜はおむれなんだ。おとうちやが、カンロあめをかつてくれたのぞたべたおった。おとうちやが、

「はやくおなよ。」「っていった。ぼくはじうしをもむれなんだ。

どの夜は「めいでん」だったのぞ、かいちゆうどんきをてらしめた。どうして「めいでん」っていうのぞ、かいちゆうどんきをてらしめた。おとうちやがもうひとつのかいちゆうどんきをむって、

「K のところまで、いってきよ、きをつけておきなよ。」「って行って行った。

おとうちやがかえって来たのぞ、ぼくは、

「K ながれた。」「ってきいたら、おとうちやが、
「もうじきながれる。」「っていったのぞぼくは、K がながれるとぼくの

うちまで、ついで来るのぞ、ぼくは、おとうちやに、

「にげまいか。」「っていったら、
「まあどうあわてるな。」「っておとうちやがいった。そのときもう F は

ねていた。ぼくとおとうちやは、カンロあめをたべた。

二十八日の朝、おかあちやがかえって来た。
へ三十六年